

して取揚げて絞^{しぼ}り、清水^{せいすい}を以て數回洗滌^{たうじやう}しまして酸味^{きんみ}なきよーにして水氣^{みづけ}をさりてよくかわかすのでありませす

さきには鰯外^{いわし}をもて一月^{ひとつき}のつとめを怠^{おぼ}りぬ、今又旅中のゆまをもて一月^{ひとつき}のつとめを怠^{おぼ}る、次にはこのおぎないなまむとおもへり

(料理詞)

石井泰次郎

◎そばろ切^{ぎり}、細^{ほそ}くけづりたるをいふ、又^{また}をぼろとのみもいへり、

◎えりがつを、かつをぶしを、よりたる如^{ごと}く、小刀^{たば}にてうすく削^{けず}りたるをいふ、又花^{またな}かつをともしへり

◎はねがつを、これは大^{おほ}きく削^{けず}りて、はねかへりたるをいへり

◎目刺^{めざし}、小魚^{こぎな}の乾物^{かじもの}の目をさしてつかねたる、今は目刺^{めざし}といへり、兩刺^{りやうざし}として川魚^{かはうを}の小さきを二つ申^まにさしたるあり、

◎山吹^{やまぶき}なます、夏^{なつ}の初^{はじめ}の鱸^{たます}なり、ふなをつくり身^みにして、山吹^{やまぶき}の花^{はな}をかいしきたる上に盛^もるをいへり、

◎卵^うの花鱈^{はななます}、ぬたなますの上^{うへ}へ、湯^ゆびきたる魚^{うを}湯煎^{ゆせん}ざつとしたるなり)の身^みをちらし盛^もるなり、またおろし大根^{たいこん}をおきても、卵^うの花^{はな}といへり

◎だし、かつを、煎^{いっ}て味^{あじ}をだしたる汁^{じゆ}をいふ、本名^{めい}は、かつをいろりといふ、いろりは煎取^{いりとり}の約^{やく}なり、煮^にだしたる汁^{じゆ}といふべきを、略^{りやく}して、だしとのみいへるなり、豆^{まめ}なるは、豆^{まめ}のいろりなり、こんぶはこんぶいろりなり、今は共^{とも}に、單^{たひ}にだしとのみいへり、片言^{かたこと}なり、

◎庖丁刀、今ははうちやう、とのみいへり、これ

も、かたなといふべきをはぶける片言なり、

◎切板、今はまないたとのみいへり、古くは切板

とさへり

黒澤登幾子傳補遺

下村三四吉

二十三日の審問後は「十日餘り捨られて更に呼

出しなかりけり、もはや卯月も暮て行、五月の闇

の晴れやらす」ほとゝぎす血に啼くころとはなり

ぬ。その七日并に十五日の二回、更に呼出しあり

て、「此度江戸表に於て石谷因幡守、池田播磨守、

松平伯耆守殿、御尋の筋有て江戸表へさし下す」

との命をうけぬ。

……………一禮を述て立出れば次なる大白砂にて

御繩をほどきて、白布を帯の如くたゝみて御繩

の替りに掛替らる、等丸駕籠をつり出して、其

中に新しき四布ふとんを二枚敷て、其中に乗せ

らる。諸士代の御方々に一禮をなして、駕籠に

乗り、大なる門を出れば、御役方には、柏原與

五郎、柴田勇四郎御兩所、ついの四枚駕籠新し

く仕立、等丸駕籠の中に引をへ、乗かけ一駄、

長持一竿、小使侍三人、其内二人は御方々の御

家來衆、外に露拂二人、都合八人、大津までは

四五十人白装束に送らるゝ。大津より皆々駕籠

にていとまこひしてわかる。其より五十三次の

宿々、町役人残らず押棒つき、赤綱手先二行に

連り、道中の雲助在々所々より人足數多呼出し、

宿々より露拂二人づゝ、都合四人づゝの下坐

ふれにて、恰も大名の往來の如し。問屋場の